

ホーソーンのエクフラシス美学

The Blithedale Romance における写実と改変

石川志野

序

『ブライズデイル・ロマンス』(*The Blithedale Romance* 1852)は、周知のとおりナサニエル・ホーソーンのブルック・ファームでの実体験を元にかかれている。このような現実の出来事と、空想上のものごとの接続、融合がホーソーンの「ロマンス」世界を形づくっているとすれば、その端緒はどこに求められるのだろうか。それまでには美学美術的な価値観を十分に養う機会が少なかったアメリカでは、1840年代になると芸術に対する意識が高まり、1847年にアメリカ版が出版されたジョン・ラスキンの『近代画家論』(*Modern Painters* 1843)が好評を博した。ホーソーンも、『近代画家論』から新しい芸術的感覚を学んだ一人で、1848年に同書を図書館から借りた記録が残されている。ホーソーンはラスキンの絵画論から一体どのような創作上のヒントを得たのであろうか。

1. 溺れる女：オフィーリアとゼノビア

ホーソーン『ブライズデイル・ロマンス』とジョン・エヴァレット・ミレーの『オフィーリア』は大西洋を挟んで1852年に発表され、同じモチーフ、すなわち恋に破れ、傷心のうちに川に落ち、水の中で息絶えた若い女性の姿がある。ミレーは、芸術雑誌に“prince of Realists”と紹介されたことがあるラファエル前派の画家である。シェイクスピアの『ハムレット』第4幕第7場のオフィーリアが川に浮かんでいる状況を描くにあたり、ミレーは19歳の女性モデル、エリザベス・シダルが浴槽に横たわる姿のスケッチとロンドン郊外の hogsmil 川の長期間の写生で描いたイギリスの夏の景観美を合体させた。実際の自然風景をじっくりと観察し、見たままをそのまま正確に写実的に描こうとするミレーの姿勢は、ラスキンが『近代画家論』で提唱した「自然への忠実」に合致している。現実を観察した自然の姿を、創作者が歪曲することなく、あるがままに描くことをラスキンは同時代の風景画家に求め、ミレーはそれを実現した。注目したいのは、『オフィーリア』の絵に現れる植物は、シェイクスピアが書いたものだけではなく、ミレーが独自にオフィーリアの悲劇的な運命を暗示するような植物を描き入れた点である。例えばケシの花はオフィーリアの死を象徴するが、『ハムレット』には書かれていない。つまり、台本のなかには存在しなかった花は、ミレーの美的観点から描き加えられたのだ。緻密な写実的描写の自然風景とシェイクスピアの文学テキストを視覚テキストに置き換える巧みさに、ミレーの豊かな文学解釈も加わった『オフィーリア』は、現実と想像の世界を融合した絵画だと言える。

ホーソーンも、恋に破れ、失意のうちに溺死するゼノビアを文章で描写する。水の中で息絶えたゼノビアの様子は実に詳しく描かれるが、これは川で溺れた少女の捜索にホーソーンが加わった時の日記の描写と酷似している。さらにホーソーンは水死した少女の描写に、画家や大理石という言葉を用いており、事件を写実的に記録する際には、文字テキストだけではなく、絵画や彫刻といった美術、視覚テキストに関わるものの助けを借りた。『ブライズデイル・ロマンス』のゼノビアの水死体の描写は、創造の過程で頭の中で思い浮かべた様子だけではなく、ホーソーンが実際にその目で見た、現実におこった出来事の記録が大いに利用されていたのだ。それは、画家のミレーがモデルを使ってオフィーリアにあたる人物のスケッチをし、戸外で川や岸の植物の写生をしたうえで絵画に活かすのと同じような創作技法だといえる。時系列的に遡るなら、1846年の事件を記録した時には、ホーソーンはラスキンの『近代画家論』を読んでいなかった。だが、以前から自然や人物を観察したうえで詳細に記述するために、目でとらえたものを正確に記憶し、文学テキスト上に写実的描写で再構築する能力を磨き、見たものを正確に表現しようとしていたホーソーンの様子は、ラスキンと共鳴する。言い換えるならば、ラスキンの目指す「自然への忠実」と一致するような創作精神が、『近代画家論』と出会う以前から、ホーソーンには備わっていたのである。

ミレーの『オフィーリア』とホーソーン『ブライズデイル・ロマンス』は、同じ1851年に大西洋を挟んで創作され、創作者が現実世界で観察したことが文学的想像力に取り入れられ、極めて写実的に表現された不幸にも溺死した女性の姿が描かれている。そして二つの作品には、共通の理論的根拠、ジョン・ラスキンの『近代画家論』があったのではないかとと思われる。

2. ホーソーンと写実的表現：ミレーとハント

ラスキンの評判がアメリカで最高潮に達した頃、ホーソーンはイギリスでミレーやウィリアム・ホルマン・ハントの絵を見ている。ホーソーンはラファエル前派の絵の鑑賞の仕方は、絵画の見方だけではなく、普段のホー

ソーンの対象の観察の仕方にも関連性があると考えられる。ホーソーンはラファエル前派が全てを写實的に、例えば髪の毛の一本一本を生きているかのように描き尽くそうとすることは、結果的には幻想を失わせる恐れがあり、観察したことをそのまま表現することに成功した絵だとしても、「自然」のほうが芸術として上であるところと見え、写実主義の画家たちの限界を指摘した。さらにホーソーンは「自然」そのものを完璧に写し取り、細密に表現する努力をするよりも、大切なのは“semi-obscurity”すなわち半ば曖昧な何かを完成されたものに加えることであり、そのことにより、作品がいつそう自然に近くなるという持論を展開する。芸術家が自分の創作物を、自然により近づけることを求められているというホーソーンの見方自体は、ラスキンの教えの「自然への忠実」と通底している。しかしながら、ホーソーンは自然を観察して、目が捉えたものをそのまま完全に再構築する試みだけでは、自然に接近することは難しいという解釈をしている。ホーソーン流の「自然への忠実」は、観察したものの再現性をより高め、さらなる写実を追究することではない。完全な模倣、完璧な再現を最終的な目標とするのではなく、ある程度まで観察したものを写しとったあとは、そこに作者がなにか独自に曖昧なものを付け加えることが良いとした。この考え方を以前からホーソーンが持っていたとすればゼノビアの水死の写實的表現は、現実の観察の日記の表現そのものではないはずである。作者の選択によりなんらかの「曖昧さ」を加えることで、実際の観察や現実に見たままより、一段階、その場面には抽象化が加えられる。そのことで、効果的にずらしが生まれ、幻想や空想の余地があり、意味が決定しないことで創造的になることをホーソーンは期待したのだ。川で溺れた少女と、腕の様子や体の向きなどは、ほぼ一致して描かれるゼノビアの姿は、作品内で“the attitude of prayer” 祈りを捧げる姿とされているが、日記では“a more quiet attitude”と書かれている。ここで、ホーソーンは実際の溺死を観察した時の表現をそのまま使うのではなく、“prayer”という祈りを読み込んだ一言と入れ替え、ゼノビアの姿に感傷的な意味と宗教的な雰囲気をつけ加えることに成功している。さらに、ゼノビアは自死したけれども、祈りの姿勢で神の下へと旅立ったのだ、と慰めを見出したいカヴァデイルの心情が加味されたといつてよい。

目で見たものを、完全に再現することが仮に可能だとしても、追求し過ぎれば望ましい幻想が失われ、一転して想像上もっともわざとらしい作り物“the most made-up things imaginable”になってしまうとホーソーンは考え、観察にもとづく過度の再現方式に異を唱えた。したがって、ホーソーンは、作品中で、絵画的描写や写實的な表現をする場合に、目で捉えたものにすこしの曖昧さを付加することで、抽象度の段階をあげようとした。現実とのずれを作者が意図的に作り出すことにより、より自然な人物、景色を創作世界に作りあげようとしていたのだ。ホーソーンのみレーやハントへの評価は、創作と写実の関係性を彼がどのように考えていたかを理解する一助となる。また、ラファエル前派の目指した写実と、ホーソーンが行なった写實的表現は、“semi-obscurity”の有無により異なっているが、両者の根底には、ラスキンの求める「自然への忠実」の追究があったことが明らかである。

結論

『七破風の屋敷』の序文においてホーソーンは、ロマンス作家には、作家の選択と創造にもとづく権利があることを宣言した。作品を絵画に喩え、創作のために雰囲気装置を駆使して画面の明暗や陰をコントロールすることがロマンス作家には許される。この雰囲気装置の具体的な一例として、ラファエル前派の絵画鑑賞で述べていた“semi-obscurity”何らかの曖昧さを、観察した景色や、写實的な描写に加えるという手法があると考えられる。アメリカ人の19世紀半ばの美学芸術鑑賞の力の発展には、ラスキンの『近代画家論』が欠かせなかったが、その一読者であったホーソーンは表現手法は、同時期にラスキンの理念に共鳴したみレーの絵画と通じるところがあった。さらにホーソーンは独自に、創作のなかの写実に対する理念と技法を見出していた。それは、単純なラスキンの『近代画家論』の受容を超えた、アメリカのロマンス作家としてのホーソーンの自負が生み出した絵画技法と文学表現をとり結ぶ、新しい創作論と言えよう。

Selected Bibliography

- Hawthorne, Nathaniel. *The American Notebooks*. Vol. 8. *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, edited by William Charvat et al., Ohio State UP, 1972.
- . *The Blithedale Romance and Fanshawe*. Vol. 3. *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, edited by William Charvat et al., Ohio State UP, 1964.
- . *The English Notebooks 1856-1860*. Vol. 22. *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, edited by William Charvat et al., Ohio State UP, 1977.
- . *The House of the Seven Gables*. Vol. 2. *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, edited by William Charvat et al., Ohio State UP, 1972.